

学生座談会【就活編】 2013年12月25日

I. 四年次一大学院進学すべきか就職すべきか、の悩み

4年で卒業、就活する理由
修士課程進学理由

博士課程には進学せず就職する理由
博士課程進学理由

II. 就活における本学科のアピールポイントは？

その他のアドバイス、テクニカルチップ

III. 米子は地理的には就活に不利である、しかたないーその対策

IV. 職種の選択ーどう決めていったのか？

V. 全体のまとめ

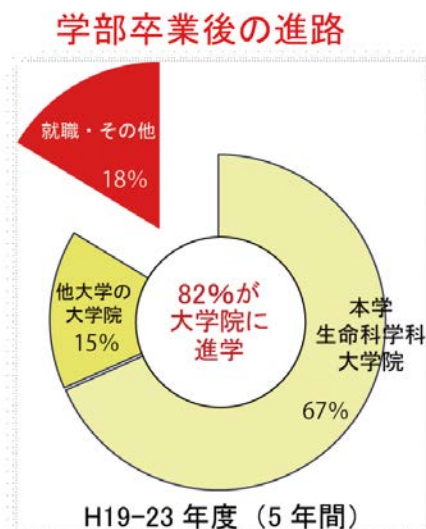
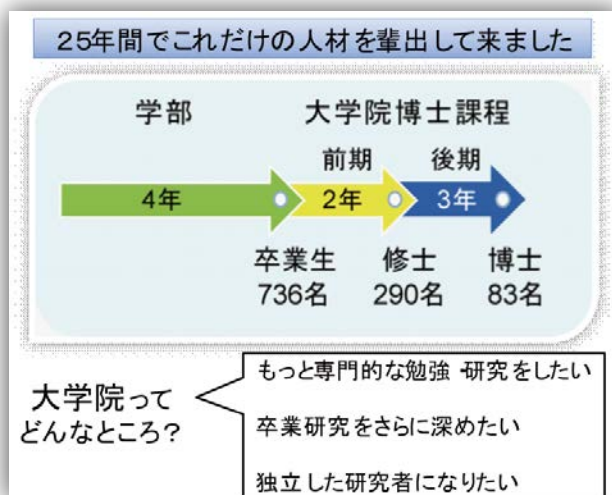
VI. 受験生の皆様へ

これらの話題に関して2年生から修士2年までの学生さん合計10数人に集まっていたき、ざっくばらんに語っていただきました。そのときの話をもとに就職担当委員が小まとめを加えながら議事録を作りました。実際には座談会に加え、各種就職関連セミナーで来ていただいたOB・OGや在校生の話も情報として加えています。

一部の学生、教員、OB・OGの意見によるものであって、生命科学科全体としての公式の見解ではありませんが、これから生命科学科をめざす受験生および保護者の方、そして本学科1～2年生に参考になる点があるかもしれません。

記事中の情報は当時の情報ですが、将来的には変更などあるかもしれません。その点ご承知下さい。

I. 四年次一大学院進学すべきか就職すべきか、の悩み



【担当委員による背景説明】授業のカリキュラムだけみると就活のことについて考える時間は少ないように見える。実際「4年生の時点では研究のことのみで、就活を考える暇なかった」という場合もある。しかしその中でもOB・OGによる就活セミナー（就活体験談、就活か進学かの悩みの経験談）や企業による就職ガイダンス、医学部学生係、鳥取大学就職支援課/キャリアセンターなどキャリア教育の機会も多くあり、3年から修士課程までの多くの学生が進学とともに就職を選択肢として残しており、比較検討の結果として進学を選んでいる場合が多いことがわかった。「就活を考える暇なかった」4年生（修士課程に進学予定）も、2年後の就活を強く意識しており、「研究者のみをめざして大学院にまっしぐらに進んでいる」のではない場合がほとんどである。一方4年で就職した学生も、進学も選択肢に入っていた。進学にせよ就職にせよ「まっしぐら」でないことは一見ネガティブに見えるが、実はこのまっしぐらではないことこそキャリアデザインの上で大切であることは懇談の中で気がついた（後述）。その点を頭に入れ、4年での進路選択、修士課程卒での進路選択の決め手となった理由を読んでほしい。

授業のカリキュラム：<http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/2775.pdf>

OB・OGによる就活セミナー：卒業生による就活ポイントについてセミナー。本学科にて開催

OBOGのコメントは <http://www.med.tottori-u.ac.jp/1/3/666/895/4869.html>

就職ガイダンス：就職情報を提供する企業の講師による就活の基本についてのセミナー

医学部学生係：<http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/12243.pdf>

鳥取大学就職支援課：<http://www.tottori-u.ac.jp/dd.aspx?menuid=1206>

鳥取大学/キャリアセンター：<http://www.tottori-u.ac.jp/dd.aspx?menuid=3449>

●4年で卒業、就活する理由

- もともと募集があるときに科捜研に行きたいと考えていたところ、ちょうどタイミングよくあった。
- (担当委員補足) 4年で卒業、就職する学生もいるが少数。今回の懇談会にはおらず意見は聞けなかったが、以前の機会に聞いたところ、具体的に食品系に興味があるので、進学も視野に入れつつ、早くから就活を視野に入れていたという意見があった。その他家計の事情もあがった(担当委員の補足:生活費のサポートの関しては育英会や博士課程以降のみであるが学術振興会の制度を利用できる。授業料免除については <http://www.tottori-u.ac.jp/dd.aspx?menuid=2092>)

●修士課程進学理由

- そもそも4年で卒業するのでは、自分が研究の力がどのくらいあるのかわからない。せっかく進めた卒業研究を先に進めたい(多数)。
- 実際のところ進学以外考える時間がなかった。
- 修士までの6年間で一つの完結であり、4年では研究も就活も中途半端。

●博士課程進学には進学せず就職する理由

- 研究はとてもおもしろいが、修士課程の間にどうしてもこれをやりたいという研究(自分のテーマ)が思いつかなかった。博士課程に行くということは、多くの場合独立した研究者をめざすことを意味し、続けて研究したいものの自分がそこまでやっていけるかどうかは不安があった。もし何か国家資格があれば少し安心できるので博士課程に進学に気持ちが傾いたかもしれない。(担当委員より補足:技術士補を3年生で取ろう→<http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/12173.pdf>)しかし、こういったことも実際に修士課程に行ってみて、試してみてこそわかった。
- 研究には向いてないと自分では判断することになった。安定な生活という価値観(担当委員補足:実際には就職イコール安定ではない)を優先する。早く社会で活躍したい。しかし実際に修士課程に行ってみて、研究に取り組んでこそわかったことであり、それはそれで有意義なことであった。

【担当委員の小まとめ】共通するのは、そこで取り組んだからこそぶれない判断をできたということかと思われる。研究者をめざすというまっしぐらな目標ではないかもしれないが、ここでの経験をもとに次を判断しようという明確な意志を持って大学院

進学するケースが多く、デフォルトだから進学しているのではないことがわかる。

●博士課程進学の原因

- あまり不安を感じないで博士課程にまで進学できた。とにかく今取り組んでいる研究を進めたいし、教員から熱心に指導もしてもらえており、今の環境で頑張りたい。

【担当委員による補足】この学生に詳しく話を聞いたところ、修士課程、博士課程研究室選びに関しても単純に卒研と同じ研究室に残るのではなく、学会等で他研究室を見て、他大学の研究者と話をし、複数の研究室を比較検討した後、「卒研で過ごした研究室を選び直し」していた。また就活も全く検討しなかったわけではなく、多数の選択肢の中から現在の進路を選択している。

【担当委員の小まとめ】博士課程で過ごす研究室の選択を行うとき、実際には研究室は日本中、いや世界中に多数あるわけである。「同じ研究室に残る」というよりも、さまざまな価値観で判断した結果、卒研および修士課程で過ごした研究室を多数の選択肢の中から「選び直し」したという表現がより適切である。このプロセスで研究者をめざすという意志が固まり、同時に自分の研究テーマを確立するということが達成できている。このように、その場その場の重要な機会に、複数の選択肢の中からどれかを選ぶというプロセスを経て価値観が定まるのは、就活か進学か、どういう職種、どういう研究テーマにするかを決める場合でも多くの人に共通であった。

このように、まっしぐらであるよりは時間をかけて期限ギリギリまで悩むことの方が大切かもしれない、なぜならこの時間は価値観が熟成されている時間なのである。逆に言えば、迷わないことは選択していないということかもしれない。もう一つの大切なことは、さんざん迷った後、一度進路を決めたら、そこからはまっしぐらであるべきだということである。ここに「かもしれない」は不要である。我が身を振り返っても岐路に立ったときにはそうであったことを逆に気付かされる。

博士課程の学生をサポートする学術振興会の制度は <http://www.jsps.go.jp/>

一月 20 万円の奨励金（返還不要）のほか研究費も支給されます。

採択率は 20-30%と決して高くはないですが、本学科では多くの学生が特別研究員として採用されています。

その他学内のエンカレッジファンド（返還不要）、育英会奨学金も利用できます（返還の必要あり）。

鳥取大学の授業料免除制度：<http://www.tottori-u.ac.jp/dd.aspx?menuid=2092>








II. 就活における本学科のアピールポイントは？

- 本学科は、医学科、保健学科、機能再生医科学専攻、染色体工学研究センターなど多くの研究室から卒研で過ごす研究室を選ぶことが基本的に可能である。各研究室で最低2〜3人、場合によってより多くの指導的立場の教員がおり、教員一人あたりの指導学生は極めて少ない（担当委員補足：他大学類似学科より学生／教員比は少ないことを懇談会参加の学生が調べて報告してくれました）。もそうすると日常的に指導教員の「濃い」指導を受け、密なディスカッションをすることになる。その経験、培った研究力が最大のアピールとなる。

（担当委員補足：研究室間の連携も強いので、学生数が少ない研究室に所属しても孤独感とは無縁である）。

生命科学科 (7教室)

- **分子生物学分野**
病気のしくみや治療法を明らかにすべく、細胞の持つ特性と遺伝子の発現調節の謎に迫ります
- **細胞工学分野**
世界初のヒト人工染色体を使って、遺伝病の治療や再生医療に貢献します
- **免疫学分野**
僕らはなぜ自らを傷つけることなく、病原体の感染に打ち勝てるのか？この奇跡の機構を探ります
- **ゲノム医工学分野**
染色体分配のルールを知り、1) がんなど染色体疾患の予防、2) 染色体ベクター開発に生かします
- **生体情報学分野**
大人の心筋細胞はどうして増えないのか？その解明から心筋の再生に挑みます
- **病態生化学分野**
正常細胞がなぜがん化するのか、がん細胞はなぜ転移をするのかを知り、その予防法を開発します
- **神経生物学分野**
脳はどのように育つのか？固いアタマをもう一度 やわらかくできるのか？脳発達のしくみを研究します

**機能再生医科学専攻
4教室)**

**染色体工学
研究センター**

**生命機能研究
支援センター**

再生医療と遺伝子治療
に特化

鳥取大学発
生命科学科発
の新しい学問

医学科 & 保健学科

染色体工学研究センター： <http://www.med.tottori-u.ac.jp/chromosome/>

生命機能研究支援センター： <http://grc1.med.tottori-u.ac.jp/Seimei/>

その他は医学部のホームページから閲覧できる

- 医学部にあることで着目された一方で、医学科の合同講義を習ったことは就活前の期待ほどは面接官に着目されなかった。
- 本学科では医師免許、看護師免許、臨床検査技師免許、またはその受験資格は一切取

得できない。教員免許に関しても今のところは同様である。しかし修士卒での就活の場面において、何かの資格がとくに必要と感じた経験は少ない。

就活において強力なアピールポイントとなったのは、実際に自分で行った研究や研究を通じて学んだこと、教員から受けた指導の内容であった。研究室選びの際には、研究本位で選択した方が（自分が全力で取り組める研究テーマに取り組むことが）結果的に就活でのアピールにつながるのである。

医学部内の幅広い研究室から所属研究室を選べること、教員一人あたりの指導学生の少なさがもたらす利点もまた、他の類似学科との差別化ができるポイントである（複数の類似の意見あり）。

- ただし資格があれば博士課程に進学したときの安全ネットにはなるので、もし何か資格が取れていれば博士課程に進学に気持ちが傾いたかもしれないと述べた学生もいた（担当委員補足：→技術士補を3年生で取ろう。

<http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/12173.pdf>

追記：対策講座開設、交通費補助のサポートも始めました。継続されるかどうかはまだ分かりませんが。）

【担当委員の小まとめ】資格に関しては、例えば教員免許などは仮に簡単に取得できるのであれば取った方が良いに決まっている。しかしそれに費やす時間や教育内容の変更、勉学や研究への負担を考えると、取るべきかどうかは一概には答えが出ない。本学科だけでなく世の中の大学、学科で見ると結局、研究と資格、どちらを優先して取るのかということであり、本学科の場合、それは研究である、ということがはっきりする。しかもそこが最大のアピールポイント。つまりは **We can't have everything.** 一どちらかしか選べない（悪く言えば、何かを犠牲にするしかない）。これは、就活だけではなく、全ての岐路においてそうである。研究の世界で生きていこう、研究力を自分のアピールポイントとしようという覚悟を持つ学生に関しては、本学科はベストに近い選択であると在學生は認識してくれているし、教員もベストを尽くしてその環境作りを進めている。「学生と教員との距離が近い」と言ってくれた学生が多かったが、それは見た目のことではなく、「研究する」ということに関して同じ方向を向いて両者がベストを尽くすということなのだろうと思った。ただし今回の座談会にはいないが、研究とはあまり関連のない分野での活躍を旨とする学生には不満が残る点かもしれない。

●担当委員による就活アドバイス、テクニカルチップ

- エントリーシート の書き方、面接対策、プレゼン対策については、教員だけではなく学生係、就職支援課、キャリアセンターを大いに利用する。

- TA（3年次実習におけるティーチングアシスタント、修士課程以上の学生が任命される）は職歴、教育歴に記載できる。
- 本学科オープンキャンパスでは在校生と受験生との懇談会（ほぼ一対一形式）を行う。これは在校生にとっては自分の受けている教育、取り組んでいる研究、その意義をわかりやすく他人に説明する良い機会であり、就活での面接、あるいは大学院入試の面接のトレーニングにもなるので活かしてほしい。また「社会貢献の経験」としてエントリーシートなどに記載しても良いだろう。

III. 米子は地理的には就活に不利である、しかたない—その対策

会社説明会、試験、面接の多くは大都市圏で開催される以上、この点は否めない。出雲におられる国引で有名な大国主命（おおくにぬしのみこと）ですら、こればかりは無理である。もうひとつ言えば、医学部以外の学部がある鳥取市湖山とも 90km 程度離れており、湖山での就活関連のイベントに参加しにくく、せっかくの無料で利用できる就活用の湖山発大阪行きバスも利用しにくい。

しかたないと嘆くばかりではなく、その対策を聞いてみた。

- 実家、家族、親戚が東京、大阪にいる場合には、そこを利用させてもらい活動期間中の滞在費を抑えた。
- 大都市圏で勤務する本学科 OB・OG、その他知り合いの住居を利用させてもらった。
- 業種を絞って受ける企業数を少なく抑える。これは結果的に自分、そして相手をしっかり見極めることにもつながる。
- 大学および医学部の交通費補助制度を利用した。
- （担当委員より補足）一部の企業は説明会、合同説明会を米子で行ってもらっている。また OB・OG のネットワークを利用して説明会を開催している。
- （担当委員より補足）米子空港が大学のすぐ近くにあり、いざというときには東京、成田、神戸への直行便を利用できる。お金はかかるが地方都市としては実はかなり便利（追記：就航状況は刻々と変わるので必ずご確認下さい）

生命科学科就活支援ページ：<http://www.med.tottori-u.ac.jp/1/3/1494/9008.html>

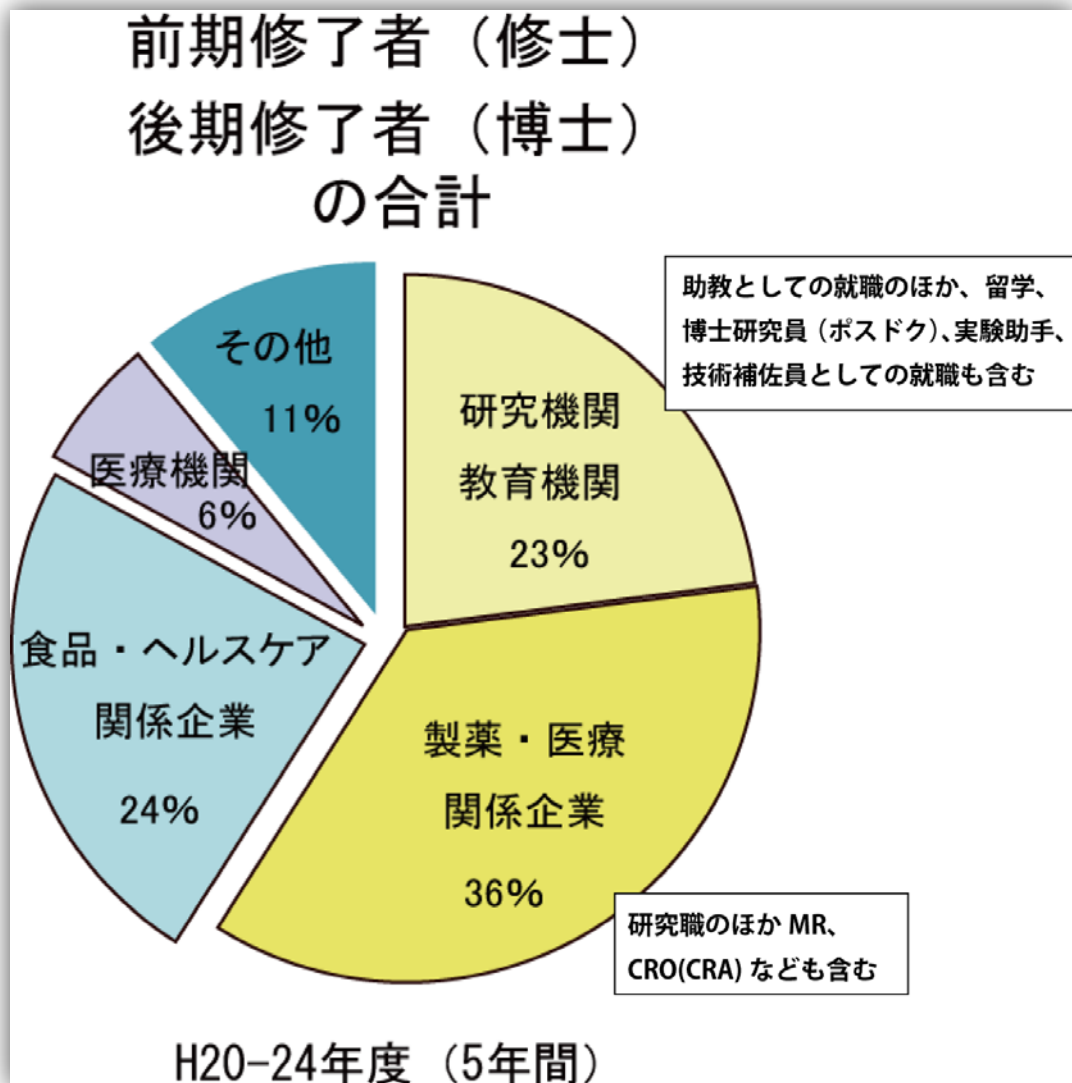
大学による交通費補助制度： 同上

技術士補を 3 年生で取ろう：<http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/12173.pdf>

米子空港からの発着便：<http://www.yonago-air.com/>

IV. 職種の選択—どう決めていったのか？

- 現状として修士卒では製薬会社や研究機関（大学や国立の研究所）の研究職は難しい（食品系の方がまだ可能性がある）。生命科学科から巣立っても、引き続き生命科学、医学に携わりたいということから、修士課程卒業後の就職先として、MR、CRO（CRA）の職種を選んだ（次頁にこれらの説明あります）。
- 医療と研究の両方に携われる胚培養士などにも興味がある。
- 科捜研にも先輩方の就職実績があるので検討した。
- あまり生命科学や研究と関係ない業種に就かれた先輩もおられるようだが、なぜその選択をしたのか知りたい。（来年以降の課題とさせていただきます—担当委員より）



MR 医薬情報担当者

CRO 医薬品開発業務受託機関,

CRA (Clinical Research Associate 治験モニタリング担当者) CROの一職務として存在

先輩方からのこれらの職種紹介は

<http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/12684.pdf>

<http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/2452.pdf>

企業や研究機関で活躍している先輩たちの様子、そしてメッセージは

<http://www.med.tottori-u.ac.jp/1/3/666/895/4869.html>

博士研究員、実験助手、技術補佐員：

教授、准教授、助教が研究方針、計画を決める立場であるのに対し、実験助手、技術補佐員はその計画にしたがって実験を遂行する立場である。多くの場合、教授、准教授、助教が申請し確保した研究費で雇用される。「留学」や博士研究員は、将来の独立した研究者（助教以上）をめざす立場であり、指導教員と共に実験計画を立て、論文執筆や研究費獲得に大きな役割を果たすことも多い。また大学ではなく研究機関では、教授や准教授という名称ではなく、部長、室長、分野長、主任研究員などさまざまな異なる名称が用いられます。

国立の研究所：

理化学研究所、国立がんセンター、国立循環器病センター、国立国際医療研究センター、国立長寿医療研究センター、国立遺伝学研究所、自然科学研究機構 生理学研究所などが有名ですね。公益財団法人ではがん研究所（癌研究会）なども有名です。その他、公立（都道府県立）の研究所も数多くあります。ご出身の都道府県の研究所についても調べてみたいかがでしょうか。

留学は就職？：

Yes です。その人の知識、能力、アイデア、技術が評価され、受け入れ先の研究者の研究費で雇用されることが多いです。また学術振興会や財団の金銭的援助で留学することも多くあります。ほとんどの場合、十分な生活費込み（研究費も支給されることもある）なので、研究に専念できます。生命科学の分野において自費で留学というケースは、担当委員は聞いたことがありません。研究者としての留学は、語学留学やホームステイからイメージされるものとはずいぶん異なるものです。詳しく知りたい方は「研究留学ネット

<http://www.kenkyuu.net/>」などで調べてみましょう。

担当委員からの補足ですが、今後の新たな職種として、ここに上げたもののほかに遺伝子医療・再生医療のコーディネーターや遺伝カウンセラー、医療系教育系出版社なども考えられます（一部すでに実績あり）。これまでの卒業生の就職先、業種については学科パンフレットを御覧ください。

学科パンフレット→ <http://www.med.tottori-u.ac.jp/files/11045.pdf>

OG・OGからのメッセージ→ <http://www.med.tottori-u.ac.jp/1/3/666/895/4869.html>

V. 全体のまとめ：

まず懇談会参加の学生には厚く御礼を申し上げます。率直な意見、厳しい意見、建設的意見、教員とは異なる見方、その全てが参考になりました。

本学科の学生はその研究力が最大のアピールである。それは研究者にならなくてもそのことは変わらない。進学か就活を始めるかの選択、職種の選択については、個人の価値観、人生観による。それとて机に向かって本を読んでいるだけで形成されるわけではなさそうである。まずは低学年から研究に興味を持ち、実際に3年生での実習、4年での卒研に取り組んでみて判断していく場合が多いようである。それはまっしぐらでなくてもよい。どのような選択肢が自分にはあるかを知り、価値観にしたがい選んでいければ（あるいは捨てるいければ）良い。そのようなカリキュラムや教育を進めていると教員は自負しているし、それに一生懸命応えてきたと多くの学生も感じている。それが「学生と教員とが近い」という意味であることを再認識できた。

一方で、最初から研究に強い関心がない場合、異なる方向を最初から向いてしまっているのでは、入学しても教員、先輩方とともに歩むことは難しいし、得るものが少なそうである。誰もが *We can't have everything* ではないとの同様、学科とてそうなのである。学科パンフレットにある通り「鳥取大学医学部生命科学科は、新たな時代の医学の発展に貢献すべく生命現象における基礎的な真理の探求を行うとともに最先端医療を支える技術創生を推進する教育・研究を行います」。だから、それ以外のことはしなくてもいいとは言わないが、そこを動かしては意味がない。

VI. 受験生の皆さまへ

研究は難しいかもしれない、研究者になれるのだろうか、なれなかったらどうなるのだろうかといった不安は誰もが持ちます。それは自然なことです。もし全く不安がないとしたら、考えておくべき問題に気がついていないということかもしれません。つまり**不安を持つことは健全**とも言えます。

不安は不安として抱えつつ、でも怯えているだけでは前には進めません。今考えてほしいことは、自分は**何が一番学びたいことなのだろうか**、自分は**いったいどのくらい研究をしたいのだろうか**、ということです。さらには「**本学科で研究者をめざす**」ことと「**他大学の〇〇学科で違うことを学ぶ**」こと、**どっちが人生をかけてやりたいことなのか？**なりたい自分はどのような姿なのか？？ これらのことについてしっかりイメージし、比較し、期限ギリギリまで調べて一生懸命に、本当に一生懸命に考えてください。

もしそこで研究者という選択が最後に残れば、**その日からすでに研究者であり、同じ仲間**なのです。そのときにはもう**後戻りはしないでください**。将来どのような研究者をめざすのか、あるいはどのような出口を探していくのかといったことは、今日参加してくれた**先輩や教員たち**と考えていけばいいと思います。実際今日参加してくれた学生は、**強さと柔軟さ**を持ち、**不安をエネルギーに変え**、さまざまな形の将来を見つけた先輩たちでした。

同じく、他大学他学科で研究者ではなく**違うことをめざす**ことも、しっかり考えた上でのものならば、**素晴らしい決断**のはずです。そのときもやはり後戻りすることはしないで下さい。どちらの決断も私たちは応援しています。